

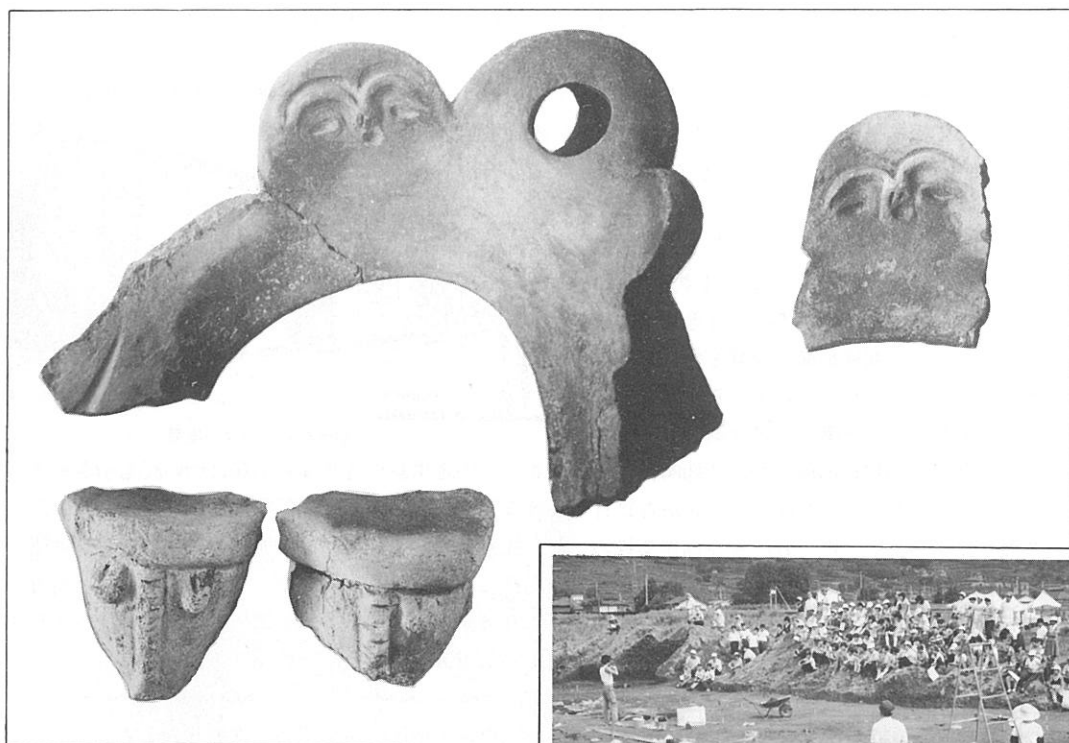
長野県埋蔵文化財ニュース

No. 7

1984. 2. 10

(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩 筑 調査事務所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



中道遺跡

—長門町古町—

写真上 顔面付香炉型土器——1個体を形成すると思われる。

下 長門町小学校5・6年児童の遺跡見学風景



(長門町教育委員会提供)

霧ヶ峯北麓及び蓼科山西麓に源を発した依田川は、大門峡谷を東流下した後、途中で流路を大きく北に変え、その左岸に東西800m南北3.5km、標高560～640mの当谷最大の段丘平地を形成する。中道遺跡はその段丘のほぼ中央に位置し、西側の山裾より北東に半島状に延びる微高地上に所存する。今まで当該遺跡は段丘縁に広がる上の段遺跡の周縁部として認識されていたに留まり、今度の事業に先立つ分布調査においても、平安～中世の遺物散布地と捉えられていた。

昨年の夏の調査面積は1,000㎡であるが、縄文前期初頭住居址4軒相当、中期住居址と想定されるもの2軒、弥生後期住居址1軒、4世紀前半住居址1軒及び

玉作工房址1軒、中世堅穴4軒、さらに各期の土壙80余個、中世の掘立柱跡凡そ300個を検出した。

縄文前期初頭住居址1軒と4世紀前半住居址及び玉作工房址の保存状態は良好で、好資料として期待できる。

写真掲上の土器は住居址と推定される床面構造の覆土層中に破片で散乱出土したが、胎土焼成等より1個の香炉型土器の各部に想定できそうである。素朴で柔和な顔面が肩部に2つ付き、また顔面背部と同型の2個は、動物の後頭部様の文様と思われ、これも香炉型土器の背部に貼付されていたものと想像される。

(調査団長 児玉卓文)

埋文センターの現況について

事務局長 山崎 昭三

岡谷市の発掘調査を始めてから2年を経過しようとしています。この間57年度には12,970㎡、58年度には27,800㎡を終了し、59年度には約7,000㎡を実施する予定であり、これで岡谷市関係の発掘調査は全部終了することとなります。

中央自動車道長野線建設に伴う用地買収の進行に伴い58年度には初めて松本平の発掘調査に入り、塩尻市で2遺跡1,380㎡を実施しました。これからは塩尻市から順次北へ向って作業を進めていくこととなりますが、特に松本平は遺跡が多く、発掘対象予定は30遺跡、面積にして409,000㎡にも及んでおります。従ってこれを円滑に推進していくため関係機関等と常に密接な連絡調整を図ると共に関係地域の理解と協力を得ながら実施していかなければならないところであります。

昭和59年度の発掘調査の計画は、当面岡谷市関係で3遺跡、塩尻市関係で9遺跡、面積は合計で約80,000㎡を予定しております。発掘調査の時期は4月から11月までとしておりますのでこの間における発掘作業員の確保が重要であり、関係地域をはじめ各種団体並びに広く一般の方々の理解と協力を得て事業の推進を図るよう努力しなければならないところであります。また発掘調査を円滑に推進していくうえにおいて当法人の

塩尻市内の調査の開始

調査第一部長 神村 透

当初、58年度の調査は岡谷市内6遺跡とを計画していたが、4月に入って用地買収の年間見通しの中で、3遺跡の調査が困難となった。それにかわる遺跡として塩尻市内19遺跡のうち、大原遺跡（国有地で営林署苗圃）が考えられたが、これも調査するまでには、手続上で種々の問題があり、調査期間の11月末までには解決が出来かねる状況にあることから断念した。一方



発掘前の御堂垣外遺跡全景

組織体制を充実強化する必要がある、このため調査研究員の増員について県教育委員会へ要請をしているところであります。

発掘作業が進むに従いまして遺構の検出、遺物の出土等も増えこれらの整理作業もまた増大しているところであり、また発掘作業の中心が松本平であるということもあり、今後の事業遂行の万全を期すため塩尻市へ事務所を新設し昨年12月に移転をしたところであります。

このほか埋蔵文化財の保護体制の整備、調査、研究



埋蔵文化財センター全景

並びに保護思想の普及等の業務についても引き続き鋭意努力をしていかなければならないところであります。今後も職員が一体となって所期の目的に従い関係者の期待にこたえていくよう、なお一層努力していく所存でありますので、関係各位の御指導と御支援をお願いする次第であります。

塩尻市東山地区の用地交渉が進展したことにより、御堂垣外、北山の2遺跡を調査することになった。一番の悩みは作業員の募集であったが、塩尻市当局をはじめ、地元及び老人クラブの理解と協力を頂き、予定した人員を確保でき、更にまた、関係地主さん方の積極的な協力もあって10月27日から発掘調査に入ることができた。天候にもめぐまれ、調査は順調に進んだ。北山遺跡は水田地であったためか、遺構は確認できなかったが、縄文・弥生・近世の遺物などが出土した。御堂垣外遺跡は、写真のように国道20号線と四沢川にはさまれた急傾斜地であったが、南に面して日当たりもよいことからか、縄文時代中・後期の住居址6軒と、後期土壌を1基発掘した。とくに4軒が重なりあった後期の敷石住居址は見事であり、狭い範囲の発掘にもかかわらず、大きな成果がえられた。この遺跡については現在整理中であるので、次号に紹介したい。

塩尻市内は遺跡も多く、その面積も広く、内容も豊かと予想されるので、今後とも多くの方々の協力をお願いする次第である。

埋文施設紹介(5)



市立岡谷蚕糸博物館
市立岡谷美術考古館

〔建物の概要〕 岡谷は、かつて「糸の都」として繁栄したため、これにちなんで昭和39年に岡谷蚕糸博物館が建設された。敷地面積は436㎡、建築面積293㎡で鉄筋コンクリート2階建である。これに鉄骨2階建の事務室・収蔵庫を昭和55年に増築した。ほかに附属施設として民俗資料庫がある。

また、昭和26年岡谷市に寄付された彫刻家武井直也の作品多数と、昭和41・42年の海戸遺跡発掘調査による膨大な考古資料とを収蔵展示するというのが契機となって昭和45年に岡谷美術考古館が建設された。敷地面積は433㎡、建築面積は288㎡であり、鉄筋コンクリート3階建で、1階が収蔵庫(137.9㎡)、2階が考古展示室(176.5㎡)、3階が美術展示室(176.5㎡)となっている。

これら両館は、併設され一括運営されているため同一入館料で両館を見学できる。

〔展示〕 蚕糸博物館には、蚕が繭になるまで飼育する養蚕業、繭から生糸を製造する製糸業、蛾から卵を採取する蚕種製造業の3分野の器械・器具類、記録資料など約10,000点を展示・収蔵している。団体希望者は事前に予約しておくとし4月～11月の期間なら昔ながらの足踏み座繰り器による糸とりの実演を見学できる。

美術展示室には、世界的な童画家武井武雄、彫刻の武井直也、清水多嘉示、洋画の高橋貞一郎、野村千春、水彩画の早出守雄、天才と呼ばれた書家津金雀仙、その他郷土の芸術家の作品を展示してある。

考古展示室には、縄文時代早期から平安時代まで年代順に、市内遺跡出土の土器・石器類を展示している。先土器時代は従来、市内には明確な遺跡が知られていなかったが、昨年、長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査で遺跡の存在も明らかになったので、将来はそれらの遺物の展示も考えている。年代別展示とは別に、縄文時代の海戸遺跡3号住居の顔面把手土器を代表とするセット

展示。また弥生時代の海戸遺跡27号住居のセット展示、古墳時代の新井南遺跡2号住居のセット展示もあり、注目をあつめている。そして一軒の竪穴住居内の生活展示コーナーも設けてあり、家屋の構造、食糧の保管法、土器の使い方、石器の置き場所などが一目でわかる。さらに代表的な遺跡を入れた遺跡地形模型は、小中学生の人気をよんでいる。

市内では梨久保遺跡、橋原遺跡の膨大な発掘資料をはじめ毎年のように行われる発掘調査により埋蔵文化財資料はとても美術考古館のみでは収蔵・展示しきれない状況になっている。そこで特別展の終了時に少しずつ展示替えするようにしている。

〔特別展〕 美術考古館では、主として美術に関する特別展を年2回実施している。昨年の野尻湖発掘展はとても好評であり、今年は谷内六郎詩画展、不破章水彩画展、その間に新収蔵作品展を実施した。近年中には考古展を企画したい考えである。

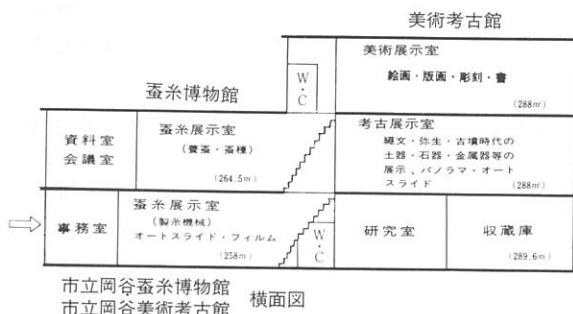
〔文献等〕 蚕糸関係では「岡谷蚕糸博物館」(概説案内書)、「岡谷蚕糸博物館資料目録1号、2号」、美術関係では「武井直也・斌彫刻作品集」、考古関係では「橋原遺跡——中部山岳地の弥生時代後期集落址——」(3,500円)その他を販売。なお、岡谷市史、平野村誌を覆刻するので、現在受付を行っている。

所在地 〒394 岡谷市本町4-1-39
(0266-22-5854)

休館日 月曜日 祝日 年末年始

入館料 一般大人100円、小人(小中学生)50円
団体(20名以上)大人60円 小人30円

交通 岡谷駅から徒歩15分、バス5分(茅野上諏訪方面行き「新屋敷」下車)



県内各地の発掘調査速報

八千穂村池の平遺跡発掘調査

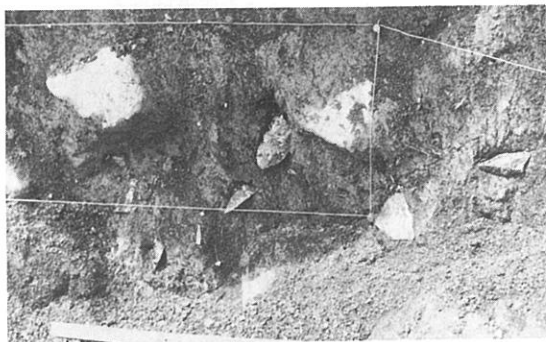
八千穂村教育委員会 佐々木春蔵

南佐久郡八千穂村池の平大反地点の発掘調査は、調査団長に八千穂村教育長出浦深氏を選び、八ヶ岳団体研究会、野尻湖友の会、八千穂村教育委員会の3団体で、参加総数167人の協力によって、昭和58年8月10日から16日までの期間に行われた。

この池の平遺跡は、八千穂高原（標高1,700m）の一角に位置するが、この地域に旧石器時代遺跡の存在は早くから知られ、昭和29年には芹沢長介氏が来村して、片面ポイント、有柄石鏃などを採取した。また同じころ佐藤達雄氏も尖頭器、石刃などを採取している。昭和46年には現在の自然園上方の林道開発によって遺跡が発見され、八千穂村教育委員会では興水利雄氏を団長として佐久考古学会の協力を得て、塩くれ場、トリデロック、湧水地点の3ヵ所を発掘調査した。その結果、塩くれ場地点のローム層中から尖頭器のほか多量の剥片を検出した。またトリデロック地点でもローム層から大形ブレイド、黒土層からは縄文時代早朝の茅山式土器が出土するなど、相当の成果を得た。

昭和57年、塩くれ場とトリデロックの間の道路斜面のローム層から佐々木徳治氏によって尖頭器のほか黒曜石片が大量に見え、これが端緒となって本年度発掘のはこびとなった。

遺跡はなだらかな丘陵の頂上付近の2ヵ所に、直径5mの範囲で遺物が集中していた。その出土状況は、ローム層（デカバミローム）から2,011点が出土し、大方は剥片であったが、石器は27点出土した。石器はほとんどが尖頭器であるが、搔器も数点、石核やスボールも出土している。尖頭器は残念ながら完全なものではなく、殆んどが二つ以上に割れていることと、剥片



ア-20グリットの尖頭器出土状況

の多いことからこの地域が石器製作所ではなかろうかとの見方が強いが、今後の検討が待たれる。また原材料の黒曜石は八ヶ岳の麦草峠産のものであることも明らかにした。

以上、発掘の概略を述べたが、八ヶ岳山麓の周囲には川上村馬場平遺跡、柏垂遺跡、小県郡和田村男女倉遺跡など、とくに尖頭器を主とする旧石器時代遺跡が数多くあり、本遺跡もこの遺跡群の一つであろうと思われる。今後それら遺跡を参考にして調査研究を進めたいと考えている。（昭和58年11月20日記）

野沢温泉村

岡ノ峯遺跡第2次発掘調査

遺跡調査会 檀原長則

岡ノ峯遺跡は、下高井郡野沢温泉村岡ノ峯に所在する遺跡で第1次発掘調査は昭和49年発刊の野沢温泉村史編纂事業の一環として坂詰秀一氏等によって実施され、縄文中期末の住居が復原されている。

この遺跡は毛無火山脈によって生成された野沢盆地の中央部の下方の台地状を呈する斜面に立地する。



岡ノ峰遺跡土壌群

今回の調査は圃場整備事業に伴う緊急発掘で炎暑の58年7月25日より8月13日の日程に実施され、59年度も続行される予定になっている。調査地は復原住居の所在する下段の台地で標高は約450mである。地質は毛無ローム層上に腐植黒色土層が堆積しており、中近世の水田造成時に遺構が攪乱され、住居址の検出は不可能であった。

〔遺構〕 足跡2ヶ所、女性と思われるローム面より検出された。土壌墓1、土壌13、柱状ピット18、溝状遺構2ヶ所などが検出されたが、土壌群は台地の円頂部に位置し、袋状を呈するもののはほとんど伴出土器片は縄文中期末が多数を占める。よって構築された時期は中期末と考えられ、東北地方との影響も考えられる。

〔遺物〕 縄文土器片（早期～晩期）、土師器片（国分期）、須恵器片、石鏃8、凹石5、磨石3、原始勾玉（滑石製）1、打石斧5、磨石斧3、石棒1、石槍1などで外に青磁片、白磁片、キセル1、鉄製馬蹄礫石など、野沢温泉村の開拓の歴史を語る資料が得られた。縄文土器片には楕円押型文土器片があり、繊維を少量含み、信濃町塞の神遺跡出土の土器片と共通点が認められる。次にやや多量に出土した羽状縄文土器片は胎底に繊維が多量に含み、器厚は0.7cm内外で器形は尖底か丸底で口縁部が山形状を呈するものもあり、新潟県布目遺跡出土土器に共通点があり、前期でも花積下層式に併行するのではないかとと思われる。

中期では前葉の土器片が少量、中葉もあまり多くなく、後葉はやや多く検出されたが、馬高式の影響が、あまり見られなかったのは意外であった。晩期では佐野Ⅰ式土器片が羽状縄文土器片の上層で少量ではあるが検出された。遺跡の主体は、今回調査地の上段にあると想定されるので、59年度調査に多くの期待がかけられている。

三郷村黒沢川右岸遺跡調査

山田 瑞穂
遺跡調査会 百瀬 新治

三郷村内を東流する黒沢川の両岸一帯は、ほぼ全域に遺跡が連なるように分布している。本黒沢川右岸遺跡は、黒沢川が伏流する地点より上流へ約1.5kmに位置し、分布調査等によって弥生時代中期前半に比定される土器片、太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石庖丁、石戈等注目すべき資料が出土している。

今回、遺跡範囲の最も川寄りの地点に老人ホームの建設が計画され、緊急発掘調査が行われた。その結果、4軒の住居址を含む遺構が検出され、縄文時代から弥生時代にかけての複合遺跡であることが確認された。少量の押型文土器片の出土により、遺跡の上限は縄文時代早期であるが、含繊維の尖底土器を伴う遺構が検出され、早期末から前期初頭にはすでに集落が営まれていたことが判明した。この時期の遺構としては住居址1、小竪穴1、いわゆる集石炉と呼ばれている土壇4基があげられる。また、中期後半曾利式期の住居址が一軒検出され、前期末葉および中期初頭の土器片もわずかにみられる。

弥生時代の遺構は、条痕文系の土器を伴う住居址が2軒確認された。いずれもローム漸移層をわずかに切



黒沢川右岸第2号住居址

る状態で検出され、ほぼ円形のプランで壁に沿って、柱穴が巡るという共通性をもっている。なお、近接して、栗林式土器を伴う土壇等も検出されている。

以上、短期間の調査ではあったが、豊富な内容をもつ遺跡である事が判明し、住居址等の発掘調査例の少ない当地方にとって、貴重な資料を加えることになった。とりわけ、弥生時代中期前半、阿島式期に比定される時期の2軒の住居址は、県下における該期の住居址としては数少ない資料として重要な意味をもつものである。伴出遺物には土器の他に扁平片刃石斧、打製石庖丁、石鏃、紡錘車等の出土があって当時の生産活動の一端を知る好資料も得られている。南安曇郡はもとより松本平への弥生文化波及の当初から、稲作、紡織等があったのか不明確なところをもっていたが、それらを知る手がかりとなることは確かである。詳細は検討が必要である。

長野市小島・柳原遺跡群 小島境遺跡の調査

長野市教育委員会 青木和明

小島・柳原遺跡群は長野市東部の千曲川自然堤防上に位置する遺跡群である。小島境遺跡はこの遺跡群の西端にあたり、小島・石渡・北尾張部の3地籍に広がりをもち、調査地字名のひとつにちなんで命名された。

調査は長野市開発公社からの委託により市教育委員会が昨年より実施し、第2次調査としての今年度は4月13日から5月22日にかけて発掘が行われた。開発前の地目は滞水の著しい水田であり、遺跡の立地は自然堤防というより湿地に近い低地に属していたが、調査の結果、黒泥土の発達した低湿地内に微妙に入り組んだ埋没微高地が存在し、ここに集落が重複して営まれていたことが判明したものである。



小島境遺跡を上空から見る

2回にわたる発掘調査面積は3,400㎡、検出された主な遺構は次のとおりである。

- 弥生中期一住居址1、土壇3、溝
- 弥生後期一住居址3
- 古墳前期一住居址10、土壇1、周溝墓1、溝
- 古墳中期一住居址1、土壇1
- 中世以降一溝（水田排水路？）

その他年代不明の柱穴群多数と、遺構に伴わず低湿地内より多量の土器（古墳中期）が検出された。以上の成果により、遺跡群を構成する各時期の要素の一端を地点的に把握することが可能となるものと思われる。

これらのうち特記すべきは玉造り関係遺物を出土した古墳前期の住居址の存在である。遺物は断片的ながら3軒の住居址から出土し、玉砥石、管玉未成品、剥片及び碎片が確認されている。これらのうち製品を特定できるものは管玉のみであるが、径2～3mmの細形管玉であり、弥生時代のそれに近似し、碧玉質である。剥片及び碎片に見られる原材は、碧玉と鉄石英の2種に限られ緑色凝灰岩を含まない。遺物が出土した住居址を玉造り工房址とするには今後の検討を要するが、該期集落内において玉生産が行われていた事は事実となり、北信においては初見となるものである。また、丸子町社軍神遺跡など東信において調査されたる遺跡とは、相伴土器型式、生産技術、原材産地、製品供給等で対比すべき点が指摘されることと予想され、4～5世紀在地玉生産を解明する貴重な資料といえよう。

辰野町半平蔵遺跡の調査

辰野町教育委員会 赤羽 義洋

半平蔵遺跡は辰野町平出の天竜川左岸段丘上に立地する。現在遺跡一帯は辰野東小学校敷地及び住宅地と

なっており、以前道路工事の際に土器片やカマドの発見があり、遺跡の存在が知られていた。

今回の発掘調査は、辰野東小学校改築工事に伴う緊急調査で、第1次分として昭和58年6月から9月にかけて新築体育館敷地内約1,000㎡あまりを調査した。

その結果、古墳時代後期から平安時代初頭に至る時期の住居址34軒をはじめ、掘立柱建物址と思われる柱穴址群、土壇、集石遺構、ローム＝マウンドなどの遺構が発掘された。遺物は土師器・須恵器・鉄製品などおよそ10,000点が出土したが、土師器・須恵器は6～7世紀代に属するものが主体であった。器種としては坏・高坏・甕・甔などが主なもので、特に平安時代初頭の第6号住居址からは「豊」の文字が墨書された土師器坏が出土している。また、鉄製遺物として刀子・鎌などがあり、石製及び土製の紡錘車も発見された。一方、古墳時代に属する第4号・10号・13号の各住居址床面上からは滑石製玉が、また同じく第28号住居址内からは金環の出土があった。



辰野町半平蔵遺跡全景

調査は今後第2次として、新設するプール及び教室棟敷地内について行われる予定で、更に多くの遺構・遺物の出土が予想される。この半平蔵遺跡は辰野東小学校を南端として、北の平出の住宅街下へ広がっているものと思われ、住居址総数200軒以上に及ぶ集落址としては町内で最大規模の遺跡のひとつであるばかりでなく、上伊那地方でこの時期を代表する遺跡となろう。一方また、この近くには頭椎大刀・馬具・金環などが出土している御社宮司古墳や御陵が塚古墳があり住居址内からの金環の出土とも関連し、あらためてこの遺跡と両古墳とのつながりが注目される。更にまたこの平出を中心とした一帯は、『延喜式』所載の信濃十六牧のひとつである「平井手牧」が置かれたところと考えられており、今後の調査における奈良・平安時代の遺構・遺物の出土の状況によっては、これを裏づける資料が得られる可能性もある。

市町村だより (4)

高山村における埋蔵文化財保護活動

高山村教育委員会社会教育係 綿田 弘 実

現在、上高井郡高山村における埋蔵文化財保護行政は、教育委員会社会教育係が行い、その体制としては係長1名、係員（嘱託）1名が担当している。当村は北信地方の一山村であり、幹線道路建設等のルートからはずれ、従来湯倉洞窟の継続調査以外、恒常的な埋蔵文化財保護事業は行われていなかった。しかしながら昭和56年の県営は場整備事業の着手以来緊急発掘調査が実施され、歴史民俗資料館の建設とも相まって、埋蔵文化財の保護・活用は緊急課題となった。特に今年度は発掘調査2件、遺跡詳細分布調査、歴史民俗資料館建設が実施され、埋蔵文化財保護事業の集中する年となった。つぎにそれら事業を紹介し、その成果と問題点を述べる。

今年度最も重要な成果を得たのは湯倉洞窟発掘調査である。当遺跡は昭和46年以来、村単独事業として連



湯倉洞窟発掘調査

年発掘・整理が行われてきた。今年度は第9次の学術発掘調査であり、縄文早期の成年女性の抱き石葬人骨がほぼ完全な姿で検出され、該期の埋葬形式を知る上で貴重な資料が得られた。更に最下層より縄文草創期土器群が検出され注目された。出土人骨は後述する歴史民俗資料館への展示に備え保存処理・研究中であり、洞窟の学術調査完遂のために一層努力する方針である。

県営は場整備事業に伴う四ツ屋遺跡群の緊急発掘は湯倉洞窟発掘と並行して実施された。この調査では6月上旬に事業対象地域全体を重機で試掘して範囲確認を行い、7月末から約2週間と9月上旬に約1週間の発掘が行われた。この結果、縄文中期後葉を主体とした、炉址のみも含めれば20軒弱の集落址が検出された。遺物も質量とも豊富である。従来良好な資料の乏しかった北信地方では屈指の資料であり、標式的な遺跡と

なろう。昨今の発掘規模からすれば2,000㎡など大規模といえないが、この調査は当村には大きな負担となり多くの問題が生じた。まず単年度事業のため、農政側との調整から発掘が梅雨末期にかかり前半は悪条件となった。また当初人海戦術による短期間の調査を計画したが、人員確保が思うにまかせず、作業員は一日交代となり、作業が円滑に進行しなかった。事前の試掘を含めた調査時期、人員確保の問題が改善されなければ、今後も予想される同規模の調査には対応できかねるであろう。また大量の出土品は係員1名では処理しきれず、外部の協力も得て整理中であるが、年度内刊行という報告書の期限も切実な問題である。

遺跡詳細分布調査は農作物の成長前に実施し、既知遺跡の範囲確定と新遺跡の検出に努めた。この調査でも調査補助員の確保と期間の点から悉皆調査が十分に行えなかった点が指摘できるが、大規模開発事業のみならず、予想以上に個人住宅による遺跡の蚕食が進行しており、本調査の結果をもとにした早急な保護対策の必要が痛感された。

歴史民俗資料館は今年度本体工事が完了、来年度開館の予定である。当初より展示企画専門委員会が設けられて事業が進行してきた。常設展示は考古・歴史・美術工芸・民俗の4分野からなり、考古は湯倉洞窟出土品、美術工芸は昭和55年に発掘調査された近世末期の磁器窯である藤沢焼窯跡出土品が展示された。

以上、今年度実施された事業の概要と個々の問題点にふれてみた。卒直に言って今年度多くの埋蔵文化財保護事業が実施されたことは望ましいことであるが、反面幾つかの問題点の露呈した試練の年でもあろう。



湯倉洞窟の人骨出土状況

今後高山村の埋蔵文化財保護活動を充実する上での早急な課題は、現在未指定のまま懸案になっている文化財の指定を実施して周知徹底することと、公民館の分館から選出されている文化財調査員との連携を密にし、地域住民との円滑な協力体制をつくることであろう。

調査報告書の紹介

◇**入山峠** 長野県北佐久郡軽井沢町入山峠祭祀遺跡発掘調査報告書 昭和58年4月27日覆刻 軽井沢町教育委員会刊（B5判 縦組 本文152頁 図版19頁）

◇**軽井沢町茂沢南石堂遺跡** 昭和58年9月30日覆刻 軽井沢町教育委員会刊（B5判 横組 本文137頁 図版40頁）

◇**曾根城遺跡** 長野県小諸市曾根城遺跡発掘調査報告書 昭和58年3月31日発行 東信土地改良事務所・小諸市教育委員会刊（B5判 横組 本文86頁 図版40頁）

◇**中村** 長野県佐久市根岸中村遺跡調査報告書 昭和58年3月27日発行 佐久市教育委員会刊（B5判 横組 本文80頁 図版30頁）

◇**後沖遺跡** 蓼科山北麓における縄文中期初頭・4世紀玉づくり工房址の調査 昭和58年11月20日発行 東信土地改良事務所・望月町教育委員会刊（B5判 横組 本文39頁 図版6頁）

◇**栃久保A遺跡** 昭和58年11月20日発行 東信土地改良事務所・望月町教育委員会刊（B5判 横組 本文14頁 図版3頁）

埋文センターから

地区割記号について 遺跡記号のつけ方について、埋文ニュース5号で若干ふれたが、埋文センターでは将来全県的な調査もあることを考えて、県内を9地区に区分した。

記号	地 区	記号	地 区
A	下水内郡、飯山市	E	南・北安曇郡、東筑摩郡 大町市、松本市、塩尻市
B	上水内郡、上・下高井郡 更級郡、埴科郡、中野市 須坂市、長野市 更埴市	F	木曽郡
		G	諏訪郡、諏訪市、岡谷市 茅野市
C	小県郡、上田市	H	上伊那郡、伊那市、 駒ヶ根市
D	南・北佐久郡、小諸市 佐久市	I	下伊那郡、飯田市

上記のように各地区をA～Iで表わし、ついで遺跡名をローマ字表記したときの文字二つを選んで遺跡記号とした。例えば岡谷市西林遺跡は、諏訪地区の記号GとNISHIBAYASIからNBをとって、GNBという

そして、歴史民俗資料館建設、遺跡詳細分布図及び台帳の作成を契機に、埋蔵文化財の調査・保存を徹底し、学校教育とも連携を密にして普及・啓蒙活動に努力していかなければならない。

◇**岡石遺跡** 東山浦野駅跡推定緊急発掘調査報告書 昭和51年3月発行 青木村教育委員会刊（B5判 横組 本文43頁 図版15頁）

◇**高部遺跡** 静香苑進入道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 昭和58年3月31日発行 茅野市教育委員会刊（B5判 横組 本文197頁 図版32頁）

◇**上塩田遺跡** 駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業埋蔵文化財緊急発掘調査 昭和58年3月25日発行 南信土地改良事務所・駒ヶ根市教育委員会刊（B5判 横組 本文24頁 図版4頁）

◇**神明・三夜塚遺跡** 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区埋蔵文化財緊急発掘調査 昭和57年3月20日発行 中信土地改良事務所・山形村教育委員会刊（B5判 横組 本文32頁 図版28頁）

◇**木曽郡お玉の森遺跡** 平安時代後半の集落 昭和58年8月31日発行 日義村教育委員会刊（B5判 横組 本文28頁 図版21頁）

◇**長野県の中世城館跡** 分布調査報告書 昭和58年3月31日発行 長野県教育委員会刊（A4判、401頁）

◇**恒川遺跡群** 昭和57年度範囲確認調査概報 昭和58年3月31日発行 飯田市教育委員会刊（B5判 横組 本文16頁 図版5頁）

ようにアルファベット3桁の表記をとって整理している。

埋文センターでは、今後ともこの方法で続けるので、各市町村、各研究団体等に於ても歩調を合わせていただければと思っている。

◇ ◇ ◇

あとがき 年も改まり、皆様には気分一新で、お仕事のことに存じます。本年の信州は、北は大雪、南は零下20度という寒さ、発掘などできない状況となっておりますが、年度末をひかえ、遺物の整理、報告書の執筆にとご多忙のことと存じます。

埋文センターもかねて建設中の管理棟が完成し、岡谷市から塩尻市への移転などのため、年末に発行を予定していた本号が今となりました。執筆された皆様には大変ご迷惑をおかけしましたこととお詫びします。本年も長野県の情報誌としてよりよいものに心掛けますので、より一層のご支援をお願いします。